

辰馬さんと私

金 森 誠 之*

辰馬さんのお通夜の晩は、世話になった、今は重役であり局長であり、大物になつてゐる人々が集まつて、若かりし日、辰馬さんに育てられた、想ひ出話に花を咲かせたのであつたが、

「辰馬さんに、怒られた人はあるかね」

と誰かが云ひ出したが、大勢の人で、長い長い月日の間に、誰もが、辰馬さんにしかられた人がなかつた。

「金森さんは、およそ役人としては、すき勝手に、やつて来られたのだから、一度位はしかられたらう」

と尋ねられたが、どう考へて見ても、しかられた記憶がない。

辰馬さんは、自分で先に立つて、範を示して行かれ、私達はそれに自然について行つたのであつた。

「何時に出勤しろ」とは命ぜられなかつた。私は、今日で云ふ、サイクリングに、毎朝辰馬さんに連れられて、多摩川の堤防を、川面を伝つて来るさわやかな風に吹かれながら、川崎駅から、自転車を、多摩川改修事務所へ走るのであつた。大森駅へ八時と云ふ、辰馬さんとの楽しい落ち合ひは、けだし「毎日八時半前への出勤」と云ふ結果になつた。

この様に万事、何とはなしに、辰馬さんの命令に、楽しく、ついて行けた。

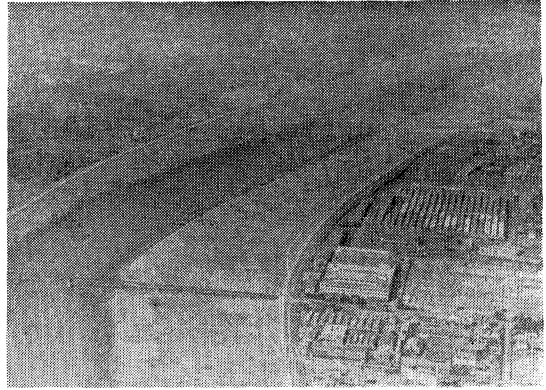
○

辰馬さんの技術上の指導は、数限りはないが、技術者としての、又役人としての考への持ち方「技術者人格」とでも申しますか、私は、いや私達は、すつかり育て上げられた。——範を示して——例へば——

私は多摩川で、圀通の設計を命ぜられた。私は利根川での経験から、「10-15 丁歩に付、1 平方尺」と云ふ割合に、其の断面をきめようとした。辰馬さんは、「多摩川沿岸は、今は水田でも、やがては街になるよ。又沿岸の人達は、利根川べりの人達のように、水につかつてゐるのに慣れてゐないから「3-5 丁歩に付、1 平方尺」に採りなさい」

と云はれた。それで私は「土木技術者は設計に当り、現状でなく、必ず将来を考慮しなければならぬ」と云ふ事と「土木工事を施すのに、役所側の考へでなく、住民側からの考へで、計画すべきである」と云ふ事を、「10-15」から、一飛びに「3-5」と云ふ思ひ切つた数に、染々と教へられた。

ガス橋より多摩川上流を望む



右岸：新三菱重工、キャノンカメラ、日本製鋼など

それから 30 年、水田は街になつてゐる。そうして、多摩川への排水は、多くなり、速くを望む事情になつて来てゐるが、快く排水は行はれてゐる。沿岸の都市としては重大なるこの恩恵を、川崎市民、東京都民は、辰馬さんの御蔭であることを知らない。テレビの言葉でないが「私だけは知つてゐる」いや神様が知つてゐる。辰馬さんは天国で、今頃この事も、はめられているかも知れない。

その頃の多摩川の沿岸は、低地であつた。雨が降ると水田に水がいく日もたまつてゐた。池沼も多かつた。

辰馬さんは、多摩川の余り土を捨てにかゝつた。

私は、外摩川勤務 10 年、多摩川改修費 500 万円のうち、200 万円を捨土でもうけた上、川崎市、大田区の池沼を無くし、現地をうめて立派な市街地たるべく、宅地化した。川崎市の広く深かつた池は、競輪場になつてゐる。堤外地にあつた、味の素、コロンビア等の工場は、昔こゝに、水が流れてゐたとは誰もが知らない。これは辰馬さんが導かれた儘について行つた結果であつて、皆さんが、今は繁栄の多摩川べりを歩いて、立ち並ぶ大ビルディングや大工場、などを見るとき、辰馬さんの拵えられた土地に立つてゐることを想ひ出して下さい。若し辰馬さんが土砂処分を深慮されなかつたら、この辺は、土は鶴見か池上の山から、運ばなければならぬのであるから、又排水も利根川並みであつたらば、必ず、工場もなく、ビルディングもなく、池沼や、湿地の儘で残つてゐましょう。

○

辰馬さんは、技術者は、技術をみがかなければならぬ

* 正員 工博 金森総合土木研究所長

いのは勿論であるが、堅く、乾いてゐてはいけない、多彩でなくてはいけない、とこれ又、身を以て導かれた。

私は、辰馬さんに使はれる迄玉突を知らなかつた。辰馬さんにさそはれて、大森の玉突屋で、いつの間にやら、30位つけるようになった。

辰馬さんについて、青木君、蒲君、宮本君、などの面々を加へ、学士会の玉台を占領しての楽しみし日の想ひ出は、今でも学士会の玄関へはいつて行くたびに、まぶたに浮んで来る。

謡曲と云ふのは、知つて居れば、非常に面白いが、学校を出て役人となつたころ、宴会があると、名井九介さんを頭に、先輩の謡曲が初まるのであつたが、知らない私にはとても聞かされるのはつらかつた。

多摩川の事務所の側にお寺があつた。そのお寺へ、辰馬さんは、自費で、謡曲の先生を連れて来られ、事務所の人達が、集まつて習つてゐた。

いつも一所に帰る習慣の私は、自然、お寺へもつて行つた。聴いて居る内に面白くなつて来た。時日は追々、多摩川の従務員家族の謡曲大会の舞台で、私は「紅葉狩り」の「シテ」をやれるようになった。

今日、ラヂオで、謡曲をかけて、楽しく聴けるのは、考へて見れば、辰馬さんのおかげである。

辰馬さんは、部下の人達を交へて、楽しまれた。いや部下の人達でなく、家族まで交へて、楽しまれた。私達は、仕事をするにも、遊ぶにも、親身なグループとなつて、いつも楽しい日が送れた。

テニスも辰馬さんは、先にたつて皆んなを引きづつてくれた。だんだん強くなつて、付近の会社か、役所と仕合をして、勝つことが多かつた。

仕合の日は、辰馬さんの奥さんも、私達の家内も、小供も、出掛けて行つて、応援に行つた。楽しい日曜のピクニックであつた。

上官と、部下ではなかつた。大きな一家族の集りであつた。辰馬さんは、奥さんと一所になつて、うちの事も

小供の事も、心配してくれ、よるこんでくれた。

多摩川会と云ふのがあつた。辰馬さんの下に居た人々の奥さん達の会で、何年も、何年もの前から、毎月一回欠かさず集つてゐる楽しい会らしい。年に数回亭主もまじり込んで、芸くらべをやつたり、福引きをしたり、ラヂオの「危険信号」や「ヂェスチュアー」などをやつて、まるで小供に帰る。

マーヂャン会などは、度々あつた。暮は辰馬さんは強かつた。とられなかつたが素人の有段者の腕があつた。私の暮の一応やれるのは、辰馬さんの導きである。

○

辰馬さんは、何事にも、熱心に、夢中になられる人であつた。東京土木出張所時代に、利根川改訂計画を立てられたときなど、文字通り寝食を忘れてやられた。

私共は、利根川を区分けにして、調査計画を受け持たされた。幾月かは、所長室の電灯は、9時~10時までとももつて居た。

出来上つた私達の計画は一応手を下され、更に元利根川改修工事に従事された、先輩の人達に集まつて貰つて討議された。

辰馬さんは、おとなしい人であるが、その時大先輩の真田さんとされた、きびしい討論は「強い人だ」と云ふ感じを染々と味はつた。

今日行はれてゐる、利根川の工事は、この計画の根幹をなしてゐる。辰馬さんの熱意は、工事を通じて永遠に生きるものである。

○

辰馬さんの言行を書き連ねれば、一つの技術者の歩むべき指針となりましょう。筆を運べば果てしが無いが、私としてのなぐさめは、辰馬さんは、多摩川改修工事に、利根川改訂工事に、永遠に生きられ、又残されたる私達に、その霊は生きてゐることであることを記して、筆を結ぶことにする。

【原文のまま掲載しました】

工場群の立並ぶ最近の多摩川流域

